フェリス女学院大学
キリスト教音楽研究所編

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（？）作曲

カンタータ第142番
〈ひとりの幼な子　われらに生まれたり〉について

音楽学部　楽理学科講師
寺本まり子

本日演奏されるカンタータ≪ひとりの幼な子　われらに生まれたり≫は、降誕節第1日（12月25日）のための作品です。冒頭の器楽曲に続いてイザヤ書第9章第5節による合唱が御子の誕生を告げると、自由詩やコラールによって神の子イエスを迎える人々の喜びが次第に高まっていきます。この歌詞はルター正統派の牧師で詩人であったエルトマン・ノイマイスター（1671-1756）の1711年の詩集から取られています。ライプツィヒ大学で神学を学んだノイマイスターは、ドイツ各地の教会の牧師を歴任した後、1715年から終生ハンブルクの聖ヤコビ教会の牧師として活躍し、名声を博しました。この教会には、1720年に行われた新しいオルガニスト採用のための試験演奏にバッハが8人の応募者のひとりとして参加し、並いる人々を驚嘆させる名技を披露したという記録が残っています。

それより10年余り前の1708年、青年バッハはヴァイマル宮廷に宮廷楽師および宮廷礼拝堂オルガン奏者として就職します。そして1714年3月2日に楽師長（コンツェルトマイスター）に昇格すると毎月1曲のカンタータの作曲と上演が義務づけられたので、この年から彼はカンタータの作曲と演奏に専念するようになりました。ちょうどこの頃、1700年代初頭にドイツの教会カンタータは転換期を迎えます。新しい自由詩のタイプがイタリアからドイツに入り、その詩型で宗教詩が書かれるようになったのですが、その端緒を開いたのが先程述べたノイマイスターなのです。彼は1704年以来教会暦に沿った9年分のカンタータ歌詞を出版しましたが、第1巻の詩集『教会音楽に代わる宗教的なカンタータ』に収められた全てのカンタータは、アリアとレチタティーヴォの交代から成り立っています。

カンタータの詩は元来は特定の教会の礼拝用に、ある特定の作曲家を念頭に置いて書かれたのですが、このように詩人が1年分、あるいは数年分をひとまとめにして出版すると、各地の作曲家達はそれを買い求めて、その詩をもとに自分の教会の礼拝に合ったカンタータを作曲するようになりました。本日のカンタータの歌詞が取られたノイマイスターの第3巻の詩集『宗教的な歌と演奏』も本来はバッハの生まれ故郷アイゼナハの教会のために書かれたもので、当時その地のカントルであったテレマンがそれに作曲しています。

さて、このようなカンタータの歴史の流れの中で、ヴァイマル時代のバッハも新しいノイマイスター風の歌詞の作曲へと向かいます。ノイマイスターの歌詞によるものも2曲ありますが、バッハはむしろその傾向を受け継いだヴァイマル宮廷の同僚の詩人ザロモ・フランク（1659－1725）との出会いによって新しいタイプのカンタータの領域に入って行きます。さらに、ダルムシュタットの宮廷詩人ゲオルク・クリスティアン・レームス（1684－1710）の歌詞も、バッハは作曲しています。

次に、カンタータ≪ひとりの幼な子≫の音楽的内容に注目してみましょう。このイ短調のカンタータは、初期カンタータによく見られるように、協奏風の器楽曲で始まります。弦合奏にリコーダー2本とオーボエ2本という楽器編成は、ルカによる福音書に述べられているキリスト降誕を告げる羊飼いと天使の話を想起させることでしょう。しかし、それに続く合唱曲は、この時期のバッハが好んで使った整ったフーガの形式を示してはいません。第4曲の合唱も、曲頭部分にはアルト―テノール、ソプラノ―バスという対になった模倣が見られますが、器楽間奏をはさむと直ぐに全声部が一緒に歩む和音的な書き方に変わります。第5曲のテノールのアリアにはオーボエ、第7曲のアルトのアリアにはリコーダーがオブリガート楽器として付添いますが、この2曲は音高は違うものの音楽的には全く同じ内容です。また、この2曲とは違ってダ・カーポ形式をとらない第3曲のバスのアリアは、同じ時期のバッハの他のアリアと比べるとしっかりとした構成をもたず、2本のヴァイオリンと歌唱声部との関係も曲頭部分の旋律の受け継ぎにとどまります。また、第6曲のアルトのレチタティーヴォの音域はわずか1オクターヴしかなく、しかもこの8小節の曲の最後の部分になってようやく6度から1オクターヴへと広がりを見せるのです。このカンタータ全曲を通しても、歌唱声部の音域の狭さが目立ちますが、特にテノールは1オクターヴに限定されています。このようにバッハの他の曲には余り見られない様式的特徴をもつこの作品は、本当にバッハの作曲したカンタータなのでしょうか。この作品は初演された年代も場所も分かっていません。

J. S. バッハの没後、次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハとJ. F. アグリーコラがL. C. ミツラーの『音楽文庫』に寄せた「故人略伝」によると、バッハは300曲程のカンタータを書いたことになりますが、そのうち約200曲が今日まで伝えられています。「約」と述べたのは、バッハの作かどうか真偽不明の作品が全ての曲種を含めると今日ではおよそ700曲あり、その中にはカンタータも含まれているからです。これには、バッハ家では数世代にわたり多数の音楽家が活躍したため、ただ「Bach」としか書いてない曲は一族の中で一番有名なヨハン・ゼバスティアンの作品になってしまったということもあるでしょう。また、弟子達や息子達の作品にバッハが手を入れたために、結局誰の作品か分からなくなったり、出版社が作曲者名を取り違えた場合もあります。本日のカンタータ

≪ひとりの幼な子≫は、先に述べたような様式の点から見て、1950年代からバッハの作品であることが疑われてきた作品ですが、それではこの作品はどのようにして伝えられてきたのでしょうか。

このカンタータは、1751年から1756年までライプツィヒのトーマス学校で学び、ライプツィヒ大学で神学を学んだ後メルゼブルクのカントルとして活躍したクリスティアン・フリードリヒ・ペンツェル（1737－1801）の写譜した楽譜の中に今日まで伝えられています。J. S. バッハの後を継いだトーマス・カントルのJ. G. ハラーが1755年7月5日に急逝すると、上級生であったペンツェルは後任のJ. F. ドーレスが着任するまでの約半年間、暫定的に合唱団の指揮を任されます。こうして彼は直ぐに演奏に使う目的で、7月23日からバッハの作品を写譜しはじめますが、ライプツィヒを去った後も1770年頃まで写譜を続けて膨大なコレクションを作り上げます。そしてこの楽譜コレクションはペンツェルの生まれ故郷エルスニッツのカントルを務めた彼の甥の手を経て、ベルリンの王立図書館に収められ、今日まで伝えられることになりました。この中にはカンタータとしてはBWV137≪主を頌めまつれ≫、BWV149≪喜びと勝利の歌声は≫、BWV157≪汝　われを祝せば≫といったライプツィヒ時代の作品が主として含まれています。それでは、なぜペンツェルは本日のカンタータ≪ひとりの幼な子≫をJ. S. バッハの曲として写譜したのでしょうか。このカンタータはトーマス・カントルとしてバッハの前任者であったヨーハン・クーナウ（1660－1722）の作品であるとも言われています。歴代のトーマス・カントルの作品はトーマス教会の楽譜文庫の中に多少は保管されていましたから、J. S. バッハの作品の中に紛れ込んでいた可能性はあるでしょう。しかし、クーナウはノイマイスターからは1711年の詩集ではなく、1716年の詩集から数曲を作曲しています。それでは、このカンタータの作曲者は一体誰なのでしょうか。このささやかなメモが皆様のお考えのご参考になれば幸いに存じます。

1）Concerto

2）Coro

Uns ist ein Kind geboren.
Ein Sohn ist uns gegeben.

3）Aria (Basso)

Dein Geburtstag ist erschienen,
so erfordert meine Pflicht,
dich, mein Jesu zu bedienen.
Doch ich Armer weiss gar nicht,
was ich suche, was ich finde,
welches dir zum Angebinde
als ein heilig Opfer tügt,
dich, O grosser Gott vergnügt.

1）コンチェルト（器楽曲）

2）合唱

ひとりの幼な子が私たちに生まれました。
ひとりの御子が私たちに授けられました。

3）アリア（バス）

あなたのお生まれになる日が来たのです。
それゆえ　私のつとめは、
私のイエスであるあなたに　お仕えすることです。
けれども　貧しい私には全く分かりません。
何を探して、何を見いだしたら良いのかを。
贈り物として　あなたにふさわしいものが、
聖なる犠牲としての　あなたに。
大いなる神であるあなたを楽しませるものを。

4) Coro

Ich will den Namen Gottes loben
mit einem Liede,
und will ihn hoch ehren
mit Dank.

4) 合唱

神の御名をたたえましょう、
ひとつの歌によって。
神を高くたたえましょう、
感謝をもって。

5) Aria (Tenore)

Jesu, dir sei Dank gesungen,
Jesu, dir sei Ehr'und Ruhm.
Denn das Los ist mir in allen
auf das Lieblichste gefallen,
du, du bist mein Eigentum.

5) アリア (テノール)

イエスよ、あなたに感謝が歌われますように、
イエスよ、あなたに栄光と名声がありますように。
私の運命は　すべてのなかで
最も愛らしい方のものですから。
あなたは　私のものなのです。

6) Recitativo (Alto)

Immanuel! Du wollest dir gefallen lassen,
dass dich mein Geist und Glaube umfassen:
kann ich die Freude gleich so herzlich nicht entdecken,
die dein Geburtstag will erwecken,
wird doch mein schwaches Lallen
dir durch Lob und Preis fallen.

6) レチタティーヴォ (アルト)

イマヌエル、あなたは受け入れて下さいました。
私の心と信仰があなたを抱くことを。
私は心からの喜びをすぐには表せません。
あなたがお生まれになった喜びを。
私の弱々しく拙い賞賛と賛美であっても
どうか　あなたの気に入りますように。

7) Aria (Alto)

Jesu, dir sei Preis gesungen,
denn ich bin durch dich erlöst.
Nichts betrübt das Gemüte,
da mein Herz durch deine Güte
überschwenglich wird getrös't.

7) アリア (アルト)

イエスよ、あなたに賛美が歌われますように。
私は　あなたによって救われたのですから。
私の心が悲しみに曇ることはありません。
あなたの溢れんばかりの善によって、
私の心は　慰められていますから。

8) Choral

Alleluja, gelobet sei Gott,
singen wir all'aus unsers Herzens Grunde:
denn Gott hat heut'gemacht solch Freud',
der wir vergessen soll'n zu keiner Stunde.

8) コラール (合唱)

アレルヤ、神が賛美されますように。
みなで心の奥底から歌いましょう。
神が今日かくも大きな喜びをお創りになったのですから
それを私たちは何時も忘れてはなりません。